

猫白血病ウイルス感染症（FeIv）とは

唾液、尿、糞便、乳汁、涙、鼻汁、血液などにウイルスが分泌されます。ケンカや交尾、トイレや食器の共用、グルーミングなどによって感染する恐れがあります。屋外に出る子は特に危険です。

感染急性期に重症化して敗血症等で亡くなったり、急性期をしのいで慢性化(持続感染)した場合でもリンパ腫や免疫低下による別の感染症が影響して、寿命に影響を与える可能性が高い疾患です。

血液検査によって診断されますが、感染後すぐには検出されないため、感染リスクの高い行動があったときから2~4週間ほど経ってからの検査が必要です。また検査で陽性であっても、一過性である可能性があります。3~4か月後の再検査でも陽性であれば、持続感染であると確定されます。

《急性感染期の症状》

- 発熱
- 血液検査で好中球減少や白血球減少、貧血が見られる。
- 元気、食欲の消失
- リンパ節の腫れ
- 免疫低下による口内炎 など



《猫白血病ウイルスに関連する疾患》

- リンパ腫
 - 多発性繊維肉腫
 - 免疫介在性疾患(溶血性貧血、糸球体腎炎、ブドウ膜炎、多発性関節炎など) など
- 免疫が低下するため、様々な感染症にかかりやすくなります。リンパ腫や猫伝染性腹膜炎(FIP)によりけいれん発作などの脳・神経症状がみられることもあります。

《治療》

根本的な治療は無く、持続感染になるとウイルスを完全に排除することは出来ません。

◆二次感染の防止

免疫の低下により細菌感染を許容しやすい状態になっています。抗菌剤で感染を抑えたり、点滴を行って一般状態を維持します。

◆インターフェロン治療(注射)

感染初期は、ウイルス感染をした細胞とまだ感染を受けていない細胞とがあります。インターフェロンはまだ感染を受けていない細胞を抗ウイルス状態にし、感染を受けてもウイルスの増殖を防ぎ、ウイルスの消滅を期待するものです。ウイルスに対して直接働くお薬ではないものの感染初期であれば効きやすいとされています。3~5日間連日投与を数クール行うことが一般的です。

◆健康観察

急性感染期を乗り越えて持続感染に移行した場合でも慎重な健康観察が必要です。

- 体重に気を付ける…食べているけど痩せてしまう場合は危険なサインかもしれません。
- ストレスを避ける…外出や寒冷ストレス、手術や麻酔を避けるなど
- 免疫抑制作用のある薬を避ける…免疫抑制剤やステロイド
- 妊娠を避ける…妊娠期は免疫が低下してしまうため悪化因子になります。また流産・死産率が高くなります。

同居猫ちゃんがいる場合、検査を行って陰性であれば5種ワクチン接種をおすすめしております。
※ワクチンでも完全に防御できるわけではないため、隔離しての飼育が勧められます。

オノテラ動物病院

